

武蔵野日曜聖書講筵 復活節

キリスト復活の真義

――イザヤ40、53章、マタイ27章、ルカ23章、ヨハネ1章――

1994年4月3日

小池辰雄

初めに行為あり 神の現象体 自己中心が罪 罪が無くなると聖霊がやってくる 自分をキリストに献げた心 霊的実在 降参して平伏さなければ読めない本 天国へいくか地獄へいくか イザヤ書の預言を成就 「彼らを赦したまえ」 本現相の現象体 キリスト道 祈り

【イザヤ40】

11主は牧者のごとくその群をやしない、その臂にて小羊をいだし、之をその懷中にいれてたずさえ、乳をふくます者をやわらかに導きたまわん。……
15視よもろもろの国民は桶のひとしずくのごとく、権衡のちりのごとくに思いたもう。島々はたちのぼる塵埃のごとし。16レバノン¹⁶は柴にたらず、そのなかの獣は燔祭にたらず。17エホバの前にはもろもろの国民はみななきにひとし。エホバはかれらを無もののごとく、空しきもののごとく思いたもう。……
22エホバは地球のはるか上にすわり、地にすむものを蝗のごとく視たもう。おおぞらを薄絹のごとく布き、これを住うべき幕屋のごとくはり給う。
23又もろもろの君をなくならしめ、地の審人をむなくせしむ。24かれらは僅かに植えられ僅かに播れ、その幹わずかに地に根ざししに、神そのうえを吹きたまえば、即ちかれて藁のごとく暴風にまきさらるべし。25聖者いい給わく、さらばなんじら誰をもて我にくらべ我にたぐうか。26なんじら眼をあけて高をみよ、たれか此等のものを創造せしやをおもえ。主は数をしらべてその万象をひきいだし、おのおのの名をよびたもう。主のいきおい大いなり、その力のつよきがゆえに一をも欠くることなし。

【イザヤ53】

1われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。2かれは主のまえに芽えのごとく、²燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたうべき艷色なし。3かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人に³して病患をしれり。また面をおいて避ることをせらるる者のごとく侮れたり。われらも彼をとうとまざりき。



4 まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5 彼はわれらの愆^{とが}のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安^{やすき}をあとう。そのうたれし瘡^{きず}によりてわれらは癒されたり。6 われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

7 彼はくるしめらるれどもみずから謙^{へりく}だりて口をひらかず、屠場^{ほふりば}にひかる羔羊^{こひつじ}の如く、毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。8 かれは虐待^{しいたげ}と審判^{さばき}によりて取り去られたり。その代^よの人のうち誰か彼が活けるものの地より絶^たれしことを思いたりしや。彼は民の^たたがの為にうたれしなり。9 その墓はあしき者とともに設けられたれど、死ぬときは富めるもの^{あらび}ともになれり。かれは暴^{あつ}をおこなわず、その口にも虚偽^{いつわり}なかりき。

10 されどエホバはかれを碎くことをよろこびて之をなやましたまえり。斯てかれの靈魂^{たましひ}とがの献物^{そなへもの}をなすにいたらば彼その末をみるを得その日は永からん。かつエホバの悦び給うことは彼の手によりて栄ゆべし。11 かれは己がたましひの煩勞^{いたずき}をみて心たらわん。わが義^{ただ}しき僕はその知識によりておおくの人を義とし、又かれらの不義をおわん。12 このゆえに我かれをして大いなるものととも^{えもの}に物をわち取らしめん。かれは強きものととも^{えもの}に掠物をわちとるべし。彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ、愆^{とが}あるものとともに数えられたればなり。彼はおおくの人の罪をおい、愆^{とが}あるものの為にとりなしをなせり。

【マタイ27】

45 昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。46 三時ごろイエス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』⁴⁷と言ひ給う。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いしとの意なり。……50 イエス再び大声に呼わりて息絶えたもう。51 視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震い、磐^{いし}さけ、52 墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體^{しかばね}おおく活きかえり、53 イエスの復活^{よみがえり}ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。54 百卒長および之と共にイエスを守りいたる者ども、地震とその有りし事とを見て、甚く懼れ『^げ実に彼は神の子なりき』⁵⁵と言えり。

【ルカ23】

33 髑髏^{されこうべ}という処に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右一人をその左に十字架につく。34 斯くてイエス言ひ給う『父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり』……39 十字架に懸けられたる悪人の一人、



イエスを譲りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』⁴⁰他の者これに答え禁めて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。⁴¹我らは為しし事の報いを受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為さざりき』⁴²また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶えたまえ』⁴³イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』

【ヨハネ1】

¹太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。²この言は太初に神とともにあり、³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。⁴之に生命あり、この生命は人の光なりき。……¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。……¹⁸未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。……²⁹明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。』

●初めに行為あり

一般には、「キリスト教」と言ってますけれども、私は「教」という言い方は嫌いです。「キリスト道」

です。決して教えではない。実践するところの内容は、教えではなくて正に道なんです。日本人は道の民です。またイスラエル人がそうです。実践的なこと、自分の足で歩く。ものを言うときには、実践が、行いが先行していなければいけない。行為が先行していないような言葉というものは空しい。実存をもって証明されて、それからものを言う。何かものを言ってから、するのではない。

「太初に言あり」

とヨハネ伝1章1節に書いてありますけれども、これをゲートがファウストをして

「初めに行為あり」

と訳しなおした。さすがはゲートです。初めに行為がある。実行してからものを言う。ものを言ってから、やるのではない。それが我々の平常の在り方の本当の性格でなくてはならないと思っております。黙って行為をする。それから、言うなら言う。言わなくても、実は行為そのものが本当の言葉なんです。キリストは何かものを仰つても――言葉が先のことももちろんありますけれども――必ず行為をもって裏付けられる。行為の裏付けのないような言葉は空しい。

あるドイツ人が私に言いました。

「日本人はよくしゃべるけれども余り行わないではないか」



と。ドイツ人にそう言われると、文句ない。ドイツ人は非常に行為を重んずるわけです。

「初めに行為あり」です。ヨハネ伝に

「初めに言あり」

なんてあるものだから、うつかりすると間違えてしまう。

● 神の現象体

「¹太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。²この言は太初に神とともにあり、³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。⁴之に生命あり、この生命は人の光なりき。……¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。」(ヨハネ1:1-14)

しかし、面白いですね、「言は神なりき」とある。そして、「言は神と偕にあつた」というこの「言」とは何かというと、実はキリストのことだ。ヨハネ伝第1章は凄い。

聖書を読むと本当に驚きます。私は今日のキリストの復活のところを読んでいて、参った。キリストは大変なひとだ。特に新約聖書は凄い。しかも、やはり何といつても凄いのは福音書です、キリスト中心ですから。イエスというひとは神の現象体だ。

「我を見しものは父を見しなり」

という。「神さまはどこにあるか」なんて、いくら探したって出てこない。

「私が神さまの具象だ、現象体だ」

と。こんなことは誰も言えることではない。キリストだけが言える言葉です。仏陀は如来の現象体だ。

「¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり。」

とある。「我々の間に幕屋を張った」という言い方です。「幕屋」というのは我々の肉体のことを幕屋という。

実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。」(ヨハネ1:14)

「恩恵」というと、何か物かと思うけれども、そうではない。恩恵というのは神さまの愛の実体なんです。「賜物」というのはその愛の実体から流れてくるところの天的な福音的な現象のことをいう。恩恵というのはその元のことです。霊界に霊的な存在として顕れたキリストが、今度は相対界に現世に実体として顕れた。それが14節の、

「言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり。」

ということ。もともと霊的な凄い存在だから、我々と同じ姿に現れても、その言うことがケタ違いです。我々はもう圧倒されて読む。解釈ではない。

「これはどんな意味だ」

なんてことではない。キリストという実体に、読んでいると圧倒される。



圧倒されるような読み方、平伏しの姿にさせられるような読み方、それが本当の福音書の読み方になる。「これはどんな意味だ」なんて言っているうちは、いくら読んでもダメなんです。

「参りました!」

と平伏さなくては。降参する。降参すると、その内容が入ってくる。

●自己中心が罪

18節、誰も神さまを見た者はない。

「¹⁸未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。」

(ヨハネ1・18)

ヨハネ福音書というのは凄い。福音書の中ではヨハネ福音書が一番霊的な福音書です。マタイは言葉の世界、マルコは行為の世界、ルカは心の世界がそれぞれの中心です。ヨハネになると霊的な現実になる。だから、ヨハネ福音書というのはもの凄い。新約聖書を福音書のところだけ破ってポケットにでも入れて、しょっちゅう電車の中でも読んでいればいい。一番楽しくなる。力がくる、光がくる、生命がくる。

「父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり」

とある。「懷にいる」というのが非常に日本語としても楽しい言葉ですね。お母さんの胸の中に小さい子が抱かれているように。

「²⁹明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ

世の罪を除く神の羔羊。』」(ヨハネ1・29)

「羔羊」というのは「アムノス」という字です。子羊は、イザヤ書40章に書いてあるとおり、抱かれています。キリストのことを「羔羊」という。神さまに抱かれているようなひとだから、それで羔羊という言い方になる。

我々はお互いさま過去も現在も未来も罪という自我が――「罪」とは自我ということ、自我本位が罪です――自我が取り除かれたということなのです。

「この悪い言葉、この悪い行為」

というのは枝葉に過ぎない。自我そのもの、自己中心が罪ということです。だから、私が

「無」「無の実存」

というのは、何かというと、無我、我が無いということです。我れ無しということ。自分がゼロにされる。十字架でゼロにされている、我がなくなっている。十字架の贖いで、自我がなくなってしまうている。

贖罪とはそのことです。「贖罪」(罪を贖う)という字の「罪」という字を何か具体的なあれこれの事と考えたらダメです。そうではない。罪とは、生まれつきの我々自身が罪的存在なんです。だから「罪びと」とはそのことです。「罪人」と書いたらダメです。罪とは自



我本位ということです。誰でもみな自我本位の人間、みなエゴイストなんだ。人間はみなエゴイスト、自己中心なんだ。

●罪が無くなると聖霊がやってくる

ことに今の日本人はそうだ。

「自分さえよければいい」

というような、人のことを思う思い遣りがない。思い遣りとは「恕」という字です。孔子の論語の中にでてくる。孔子に弟子が、

「あなたの教えの中心は何ですか」

と聞いたら孔子が、

「恕なるかな」

と言った。「恕」とは「思い遣り」ということです。人のために思いやつていろいろ助けたりする。本当の思い遣りはこの無我にならなければダメです。我が無くなっている。

「我は日本のため、

日本は世界のため、

世界はキリストのため」

とは内村鑑三の言葉です。

「私は日本のために生きているんだ、自分のためではない。日本は世界のためだ。

世界に貢献するような日本でなければダメだ。世界はキリストのためである」

と。

無我になると、これが無限無量の世界になる。罪が無くなると今度は、聖霊がやってくる。

聖霊は無限無量の内容をもっているから。私がなぜ聖霊ということを言うかというところ――ただ聖き霊ということを言っているのではない――無限無量の霊なんです。非常に宇宙的な我になる、宇宙我になる。そういう大きな現実、消息が分かっているのが、シナでいうと、老子です。これはエライやつです。孔子はともこの老子にはかなわない。孔子が老子に出会って、

「この人は大変な人だ。龍の如し。とてもかなわない」

と言ったという。私たちは孔子が中国の第一人者かと思ったら、どっこいそうではない。老子が第一人者です。

●自分をキリストに献げた心

キリストのまわりの女の人で一体誰が一番救われたかというところ、マグダラのマリヤです。マグダラという所はガリラヤ湖の西北西にあるさびしい寒村です。彼女が七つの悪鬼にとり憑かれてどうにもならなかったのを、キリストがその悪鬼を追い出してしまった。マグ



ダラのマリヤはキリストに非常に救われたので、完全に自分をキリストに献げた心になった。献身的な愛になった。

だから、キリストが十字架に架けられる前に、キリストにナルドの香油を頭からかけつけてしまった。ナルドの香油とは素晴らしい非常に高価なものです。そのとっておきのものを、しかも壺を割ってかけた。

「もう私は他の何ものにも使わない。あなたに一切を」

という。それは全身的な愛です。献げる愛です。

ああいう記事を読んで、感動しなければダメですよ。この頃の若い人は感動性があまりないようだね。

私は小学校から一番好きだったのは修身の時間だった。「修身」とは道德の時間のこと。先生がいろいろな実例をお話しになる。それが楽しくて、修身の時間が一番好きだった。理屈を言っているのではない。実例で話した。理論ではダメなんだ、人間は。事実をもって、事実で救われる。事実に感動する。

「恩恵と真理」

の、恩恵が大事なんです。恩恵から賜物^{たまもの}が出る。恩恵はギリシア語で「カリス」という。賜物は「カリスマ」という。このカリスが大事です。

●霊的実在

それでは、復活のところに入ります。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書全部に復活のことが出ています。大体、私は「復活」という言葉が嫌いです。

「息を吹き返して復活^ま活きる」

ということではない。イエスというようなひととは、もともと霊的実在であつたのが肉体をとつた。具体的な体^{からだ}をとつた。具体的な身体をとっているけれども、キリストの身体はまるで霊体みたいな体です。パウロが、

「生まれつきの肉の体あり、次に霊の体あり」

と言いましたね。ところが、キリストの体は初めから霊の体なんです、霊体的なんです。これは見えない。本質はキリストは霊体なんです。人には分らない。霊体だから、キリストは人のできない奇蹟をいくらでも行つた。でなければ、いわゆる奇蹟なんか出て来やしない。次元の違つた現象を起こすのはキリストだけだから。ガリラヤ湖の上を歩いてみたり、死人を甦えらせたり、そんなことは誰もできない。

「ラザロよ、起きよー!」

とえば、死んだラザロが墓から出てきた。凄いひとですよ、言葉が霊的な力をもっているからね。



●降参して平伏さなければ読めない本

あなた方、福音書はいい気になって読める本ではないですよ。

「参りました!」

と降参して平伏さなければ読めない本なんです。それをみな

「意味がどうだ、こうだ」

なんてやっているから、いつまでたつても始まらない。今のキリスト教も大体がダメだ。聖書の驚くべき現実にひとつも降参していない。「聖書研究会」なんて、研究でもって聖書が読めるかというんだ。日蓮が佐渡に流される前に弟子の日照に、

「お前は法華経を身体^{からだ}で読め」

と言ったという。さすがは日蓮だ。

第一級の人物はみな霊的です。ゲートにしても、ブラウニングにしても、キルケゴール、ドストエフスキー。フランスのユゴーも素晴らしい人だ。あの『レ・ミゼラブル』には本当に魅せられてしまう。

皆さん、第一級のものの他は読まないでいいですよ。そのかわり、第一級のものを本当に読みなさい。私は正直、そういうものを相手にして生きています。

私はひとつも疲れない。時間がくれば眠くなるから眠りはしますけれども、

「ああ疲れた」

なんて思うことはない。それは私がいわゆる元気だからではない。上から力がくるから、圧倒されているから疲れない。

●天国へいくか地獄へいくか

イエスという人はなぜ十字架に架けられたか。十字架はキリスト教のシンボルになっていくけれども。

「³⁹十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏^{そし}りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』⁴⁰他の者これに答^{こた}え禁^いめて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏^{おそ}れぬか。⁴¹我らは為しし事の報いを受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為さざりき』⁴²また言う『イエスよ、御国^{みくに}に入り給うとき、我を憶^{おも}えたまえ』⁴³イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕^{とも}にパラダイスに在るべし』(ルカ23・39〜⁴³)

素晴らしいね、

「今日、お前は私と一緒にパラダイスだよ」

と。心碎けて言った片一方の悪人が天に行つて、もう片一方が地獄に落ちる。同じ悪人でも、片一方は最後に悔い改めたから天国へいく。片一方は自己主張しているから地獄へいく。



この二人が実は人間を二分しているわけです。天国へいくか地獄へいくか。自己主張しているやつは地獄へ入る。心碎けて平伏すものは天国へ入る。サタンは傲慢な霊だから、傲慢な奴はサタンの手下だから地獄へ入ってしまう。碎けて平伏した者は天国へいく。これは人間を二つに分ける、ちょうど十字架の両方の悪人が人類を二分している代表だ。

●イザヤ書の預言を成就

人を助けて本当の愛をもつて行為したところのキリストが十字架に架けられてしまった。架けられっぱなしではない。十字架に架けられたけれども、もともとキリストは、

「我は自ら架かるんだ」

と。イザヤ書の預言を成就した。イザヤ書53章、

「1 われらが宣^{のぶ}るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。2 かれは主のまえに芽^{めば}えのごとく、燥^{かわ}きたる土よりいづる樹^{こかぶ}株のごとくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容^{すがた}なく、うつくしき貌^{かたち}はなく、われらがしたうべき艶^{みばえ}色なし。3 かれは侮^{あなど}られて人にすてられ、悲哀の人に^{やまい}して病患をしれり。また面^{かお}をおおいて避^{さく}ることをせらるる者のごとく侮^{あなど}れたり。われらも彼をとうとまざりき。

4 まことに彼はわれらの病患^{やまい}をおい、我等のかなしみを担^おえり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5 彼はわれらの愆^{とが}のために傷^{きず}けられ、われらの不義のために碎^こかれ、みずから懲^{こらしめ}罰をうけてわれらに平安^{やすき}をあとう。そのうたれし瘡^{きず}によりてわれらは癒^{なを}されたり。6 われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

7 彼はくるしめらるれどもみずから謙^{へりく}だりて口をひらかず、屠^{ほふりば}場にひかる羔^{こひつじ}羊の如く、毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。8 かれは虐待^{しいたげ}と審判^{さばき}によりて取り去られたり。その代^よの人のうち誰か彼が活けるものの地より絶^たれしことを思いたりしや。彼は民の^たたがの為にうたれしなり。9 その墓はあしき者とともに設けられたれど、死ぬときは富めるもの^{あらび}ともになれり。かれは暴^あをおこなわず、その口にも虚偽^{いつわり}なかりき。

10 されどエホバはかれを碎^{くだ}くことをよろこびて之をなやましたまえり。斯^{たましひ}てかれの霊魂^{たましひ}とがの献物^{そなえもの}をなすにいたらば彼その末をみるを得その日は永^{なが}からん。かつエホバの悦^{よろこ}び給うことは彼の手によりて栄^{たか}ゆべし。11 かれは己がたましひの煩^{いたずき}勞をみて心たらわん。わが義^{ただ}しき僕はその知識によりておおくの人を義とし、又かれらの不義をおわん。12 このゆえに我かれをして大いなるものとともに物をわかしめん。かれは強きものとともに掠^{えもの}物をわか



ちとるべし。彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ、愆あるものともにも数えられたればなり。彼はおおくの人の罪をおい、愆あるものの為にとりなしをなせり。」(イザヤ53・1〜12)

また、イザヤ書40章にも書いてある。キリストはイザヤ書が好きだったからね。

「主は牧者のごとくその群をやしない、その臂にて小羊をいだき、之をその懷中にいれてたずさえ、乳をふくます者をやわらかに導きたまわん。……15 視よもろろの国民は桶のひとしづくのごとく、権衡のちりのごとくに思いたもう。島々はたちのぼる塵埃のごとし。16 レバノン^{はこり}は柴にたらず、そのなかの獣は燔祭にたらず。17 エホバの前にはもろろの国民はみななきにひとし。エホバはかれらを無ものごとく、空しきものごとく思いたもう。」(イザヤ40・11・17)

神無きそういう連中は問題にならないと、凄いことが書いてある。カーライルが、

「イザヤ書40章は世界文学の最大のものである」

と言った。内容が凄くて、カーライルはイザヤ書40章を読んで驚いてしまったんだ。カーライルというのは文芸批評家です。

「22 エホバは地球のはるか上にすわり、地にすむものを蝗のごとく視たもう。おおぞらを薄絹のごとく布き、これを住まうべき幕屋のごとくはり給う。23 又もろろの君をなくならしめ、地の審人をむなしくせしむ。24 かれらは僅かに植えられ僅かに播れ、その幹わずかに地に根ざししに、神そのうえを吹きたまえば、即ちかれて藁のごとく暴風にまきさらるべし。25 聖者いい給わく、さらばなんじら誰をもて我にくらべ我にたぐうか。」

「聖者」とは神さまのこと。神さまのことを「聖者」と言いだしたのはイザヤなんです。26 なんじら眼をあげて高をみよ、たれか此等のものを創造せしやをおもえ。主は数をしらべてその万象をひきだし、おのおの名をよびたもう。主のいきおい大いなり、その力のつよきがゆえに一をも欠くることなし。」(イザヤ40・22〜26)

イザヤ書は凄いから、時々読んでくださいよ。とにかく聖書を熟読するに限る。そして、圧倒されてゆく。圧倒されると力がくるから。止められないです、この聖書というのは、どうも、そういう本当の読み方をしてないようだね。

とにかく、聖書は凄い言葉ですよ。特に旧約ではイザヤ書です。旧約からどれか一つを選べと言われれば、私は文句なしにイザヤ書を選びます。詩篇ではない。ルターは、

「詩篇は旧約の代表だ」

なんて言っただけでもそうではない。イザヤ書です。詩篇はこっちから讚美したり祈ったりしている。イザヤ書は上から来ている言葉なんです。



●「彼らを赦したまえ」

キリストの十字架の記事は、マタイ伝27章、マルコ伝15章、ルカ伝23章、ヨハネ伝19章にそれぞれ書いてある。「ゴルゴタ」というのは「されこうべ、骸骨^{がいこつ}」という意味ですから嫌な言葉だね。その丘で十字架に架けられる。キリストは自分で十字架を背負って行った。そして自分がそれに架かるのだから、ひどいものだ。人々を救って、死人をも甦えらせて、神さまの真理を実現していったひとを十字架に架けるというのだから、とんでもない話だ。

「悪人のバラバとキリストとどちらを赦すか」

と問うたら、

「バラバを赦してイエスを十字架に架けろ」

なんて、あきれた愚衆だ。

「³³ 髑髏^{されこうべ}という処に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、

一人をその左に十字架につく。³⁴ 斯くてイエス言い給う『父よ、彼らを赦し

給え。その為す所を知らざればなり』」（ルカ23・33〜34）

「私を十字架に架けた彼らをそれでも赦してやってください、わけの分からないこ

とをしますが」

と、十字架に架けられながら、

「彼らを赦したまえ」

と祈っているんだ。

「罪の赦し」

というのは、このキリストの言葉からきている。自己本位の罪、それを全部赦す。十字架に架けられたキリストがそう言つて、神さまに祈っている。

過去・現在・未来の我々は、自己本位なる自我、エゴイストなる我々が全部赦されている。贖罪の十字架が我々を赦してくださっている。だから、贖罪の十字架のキリストの前には平伏さなくてはいいかん。

アッシジのフランチェスコが十字架のキリストの前に行つて、十字架のキリストと会話しているところがある。彼は本当に平伏している。フランチェスコというのは素晴らしい、本当にどん底の愛のひとだ。

とにかく、人を救った愛の極限のひとが十字架に架けられるという、全くわけの分からないことがある。そして、妬む連中が、祭司だとか旧約的な人間が、

「イエスは律法に背く者だ。ユダヤ教に背く新興宗教はけしからん」というわけだ。

キリストが十字架に架けられて最後に大きな声で叫んだら、聖所の幕が上から下まで裂けてしまったとあるでしょ。あれは旧約の世界はこれでお終いだということです。ああいう凄いことが起きるんだから、本当に大変なものです。



「そんなことがあるか」

ではない。常識的にはそんなことは考えられない。ところが、これは常識の世界ではない。神の力の世界ですから、裂けてしまう。イエスという人物には、私はこの復活節を迎えるにあたって、また新しくそのもの凄さに驚嘆しました。

●本現相の現象体

そこで、「復活」という言葉。復活^ま活きたではない。本当は「復活」という言い方はおかしい。彼は肉体をとつていても、霊的な肉体ですから、十字架に架けられたつて、彼が十字架の贖罪を通つたら必ず現象してくる。本来のキリストの姿が現れたんです。復活活きたのではない。それが本現^{すがた}の相です。復活というのは本現相の現象なんです。息を吹き返したということではない。当然現れるべきことが現れただけの話です。いわゆる復活のキリストは、
「本現相の現象体」
です。だから、この霊体は凄い。弟子のところによつてきて、

「私は幽霊ではないぞ、何か食べてみせる」

と言つて魚を食べたでしょ。本現相のキリストがお魚を食べた。これはみな本当ですよ。

「あれは宗教物語だ」

と言う者がいるが冗談じゃない、物語ではない。

「45昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、

当然ですよ、これは。

三時に及ぶ。46三時ごろイエス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』
と言ひ給う。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひしとの意なり。……

「あなたに完全に従つてきた私をなぜお棄てになるか」

と。そして大声で叫んだ。

50イエス再び大声に呼ばわりて息絶えたもう。51視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震い、磐^{いわ}さけ、52墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍^{しかばね}體おおく活きかえり、53イエスの復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。54百卒長および之と共にイエスを守りいたる者ども、地震とその有りし事とを見て、甚^{いた}く懼^{おそ}れ『^げ実に彼は神の子なりき』と言えり。
(マタイ27・45〜54)

これはマルコ伝15章、ルカ伝27章にも出ている。

ペテロは、

「お前はキリストの弟子だったろう」

と問われたときに、三度も否んだ。キリストはもうそのことを予言しておられた、

「鶏が鳴く前にお前は二度私を否むぞ」



と。そのとおり。イエスというひとは先の先まで見えているひとだ。ユダもとうとう自殺してしまった。ユダというのはなかなか優れた弟子だったが、キリストを裏切った。

「預言者たちが私を預言していたことが全部ここで成った」

とキリストはハッキリ言っておられる。

「旧約の預言は全部成就した。わがこと終われり。」

と。旧約聖書ではイザヤ書をよく読んでくださいよ。イザヤ書を読むと、キリストへの驚くべき預言の書ということが分かりますから。

●キリスト道

「園の墓」という、十字架に架けられたゴルゴタの下にあるところのキリストの墓がある。空しいです、もちろんキリストはそこに居ないから。マグダラのマリヤなんかが覗いたら、もういらつしやらなかった。天使が二人現れて、

「イエスは甦りたまえり」

と言った。

「キリスト教」なんて言わない方がいい。教えでも何でもない。「キリスト」だけでたくさんだ。もし付けるなら道、「キリスト道」です。

「われは道なり」

だから。「われは教えなり」ではない。

「我は何ごとをも教うる能わず」

と、ヨハネ伝7章でキリストはちゃんと云っているんだ。何も教えてない。

「我は火を投ぜんために来たれり。」

と、ルカ伝12章にある。聖霊を投ずるために来た。

思いせまることいかばかりぞや」

その前にすることがある。それは十字架にかかること、贖罪です。

「贖罪をして、それから今度は聖霊を降だすぞ。祈って待っている」

と。これがペンテコステ、聖霊降臨です。それで弟子たちがみなひっくり返った。パウロだけは個人的にダマスコ途上でひっくり返されて、

「わが眼より鱗の^{うろこ}ごときもの落ちたり」

ということになった。みなひっくり返されて、それで初めてキリストの前に平伏すわけです。それで本当の信交の世界に入る。

「しんこう」とは、信じ仰いで（信仰）いたらダメです。信じ交^まわる、

「信交」

と書かなくては。魂の交わりです。

「われキリストの中に、キリストわがうちに」



とパウロが言っているでしょ。あれがこの「信交」なんです。ガラテヤ書でも、ローマ書でも、コリント書でも、パウロは要するにキリストを告白しているわけです。この聖書というのは楽しいですよ、光がきて力がきて生命がきてしょうがない。皆さん、そういう気持ちでお読みですか。聖書は研究なんかで分かるものか、却って遠ざかってしまう。

何しろ私も結局、独りなんです。ベートーベンはついに独りだった。本当の人間は独りにされる。ダンテもそう。

話はあちこちになつてしまつたけれども、キリストの本現すがたの相が現れただけのはなしで、いわゆる復活なんていう言葉は私はあまり好きでない。当然のことなんです、現れざるを得ないものが現れただけのはなしです。

● 祈り

それでは、祈ります。

私たちの贖い主、キリストさま。あなたの当然現れるべきお姿が「復活」という言葉で表されていますが、十字架をもつて贖罪の大業を果たされ、

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄てたまいし」

と逆説的な告白をなさり、そして、あなたは本当に驚くべき霊的生命を現象なさり、私たちにそれを二千年前も今日も同じことに、私たちが十字架において己に死に、そして復活のあなたの御生命をまた私たちもいただき、この復活節はそのようなことで本当にありがとうございました。

兄弟姉妹たちと、あなたの贖罪の御贖いと甦りの驚くべき生命をいただいて進んで参ります。毎日毎日、常に新たにあなたの生命において、生命より生命へ、光より光へ、愛より愛へと、いよいよ私たちを歩ませてくださることを信じて、御名を讃え奉ります。兄弟姉妹たちと共にこのようにして復活節の午前をあなたの甦りの記事を中心として承り、ありがとうございました。私たちの血となり肉となりました。そのようにして、いよいよ福音の証者として一人びとりを十全にこれからお用いくださらんことを願ひ奉ります。

京都においても今日は一緒に祈つて、また覚えておりますが、奥田君の京都集会の人たちをその角度からまた今日は恵んでくださるように願ひ奉ります。その他、信州、北海道、鹿児島、四国、大阪、奈良、裾野、いずこにおいても、どうぞそのようにしてこの日を初めから終りまで本当にキリストを讃美して終わることが出来ますように願ひ奉ります。

心からの讃美と感謝と祈りと、兄弟姉妹たちのそれと共に御名にあつて捧げ奉る。アーメン。

